

6. スーパーボンドの臨床応用例

6. 支台築造

スーパーボンドの象牙質接着性、金属接着性は、支台築造の分野でも有効に利用されています。たとえば、鑄造ポストをスーパーボンドで装着することにより、ポストが歯質と強固に接着し一体化するため、脱落や歯根破折の危険が減少するとともに、従来では保存の困難であった崩壊の激しい歯根も保存できるようになりました。過去には接着アマルガム法による支台築造も試みられ、多根管歯や有髄歯に対する支台築造法として非常に有効との評価を受けています。

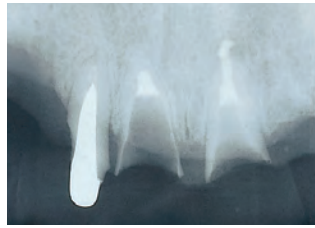
臨床上のポイント

- ①感染歯質除去を丁寧にいき、健全歯質は極力保存する。有髄歯の場合、歯髄損傷や露髄に注意し、必要な場合は歯髄の保存処置を行い、歯髄診断を確実に行う。
- ②ポスト長は可能な限り長くデザインする。
- ③窩洞が細く深い場合が多いので、窩洞面の表面処理後、完全乾燥に心掛ける。
- ④スーパーボンドの混和泥は流れの良い状態で使用し、根管内に十分行き渡るように留意する。

臨床例6-1 鑄造ポストの接着



①11に装着してあったポストが脱落し、根管内に二次齧蝕が発生していた。感染歯質を削除すると、ほとんど残存歯質の残らない漏斗状の歯根になる。



②そのX線像。無機セメント合着による従来法では、このような歯根の保存は不可能である。



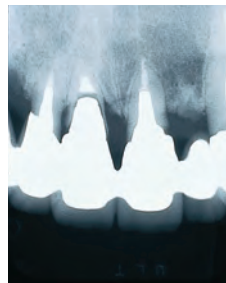
③鑄造された鑄造ポストコア。酸化皮膜を形成するための加熱処理を行った。現在はV-ブライマーの塗布により、簡単に前処理が行える。



④スーパーボンドで鑄造ポストの装着が完了した正面観。(装着1984年2月)



⑤クラウンブリッジで補綴後の正面観。(鑄造ポスト装着後1年9ヶ月経過時)

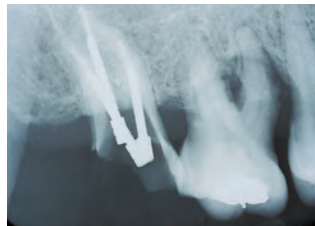


⑥10年8ヶ月経過のX線像。歯根の破折も起こらず良好な経過を辿っている。

臨床例6-2 既製ポストを用いた接着アマルガム支台築造



①軟化象牙質を除去、根管充填後、既製ポストの試適を行う。ポストの方向が異なるため強固な維持が得られる。



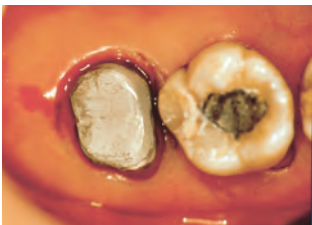
②既成ポストを試適した状態のX線像。歯冠部の崩壊は大きい、歯根部の歯質は量的に十分満足できる。大白歯はこのような症例が多い。



③分離材メタセップ(現在はスーパーボンドセップ)を塗布したマトリクスバンドを装着し、象牙質窩洞面を表面処理材グリーンで処理した後、ポリマー粉末の量を少なめに調製したスーパーボンドの混和泥を根管および窩洞内に塗布する。次いで既製ポストにも塗布して根管内に速やかに挿入する。



④スーパーボンドが硬化する前にあらかじめ練和しておいたアマルガムを充填する。



⑤アマルガム硬化後、支台歯の形成を行う。(1988年1月)



⑥9年7ヶ月経過後のX線像。(1997年9月)



⑦9年7ヶ月経過後の頰側面観。9年以上経過した現在も良好に機能している。(1997年9月)

臨床例6-3 接着アマルガム支台築造



① 4の深部カリエス。咬合痛、自発痛で来院。



② 初診時のX線像。歯髄に到達するカリエスであるが、歯髄診断の結果、正常な生活反応を示すため、歯髄保存療法を行う。



③ 無麻酔下で軟化象牙質を削除、露髄を認めたため水酸化カルシウム糊材で覆髄し、経過を観察した。約2ヶ月後、水酸化カルシウムを除去し、修復象牙質の形成を確認する。



④ 歯髄を保存した状態で、接着アマルガム充填を行った。審美的要望が強いので、オールセラミックスクラウンで補綴を行うことにし、その支台歯形成を行う。アマルガムが象牙質に良く接着しているため、支台歯形成時にアマルガムのマージン破折も脱落もない。(1988年4月)



⑤ ポーセレンライナーMとスーパーボンドでオールセラミックスクラウンを装着する。装着後1年6ヶ月後の状態。歯髄はトラブルなく良好な経過をたどっている。



⑥ 3年経過後のX線像。辺縁封鎖が良好なため、歯髄は健全な状態で推移している。歯髄を保存しながら良好な支台築造が可能な接着アマルガム支台築造の意義は大きい。